

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：53601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02390

研究課題名(和文) 助詞・助動詞・構文・文章構成を観点とする、和歌の表現研究

研究課題名(英文) Study of waka expression from the viewpoint of particles, auxiliary verbs, syntax, and sentence structure

研究代表者

小池 博明(koike, hiroaki)

長野工業高等専門学校・一般科・教授

研究者番号：30321433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、以下のとおりである。第一に、八代集の「なりけり」歌の展開を、修辞や文(句)相互の関係などから考察した。その結果、古今的表現に特徴的な理知的表現から、「なりけり」が本来持つ、内面的、述懐的性格へとという推移が明らかになった。この根底には、古今的表現を支えた理知的発想そのものの変化があるだろう。第二に、初期百首の歌末形式の調査から、好忠・順・恵慶百首では感動文が優勢だが、重之百首は感動文が最少であった。これは、重之百首の公的性格が影響しているだろう。第三に、大江千里集の注釈(1～40番歌)を行うとともに、語彙的、構文的特徴や句題と和歌との関係などを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古典和歌の表現研究は、自立語(歌枕・歌ことば)と修辞との面から、大きな成果を上げてきた。そこで、今後は、表現主体(話し手)の判断や気持ちを表したり、叙述を統括、接合、終結するはたらきをする、助詞・助動詞(付属語)と、それによって組み立てられる構文、および句切れのある、複数の文から構成される和歌においては文章構成とを観点とした、研究の段階に展開する必要がある。しかし、本研究開始当初に、文学研究においては、こうした観点を正面に据えた研究はほとんどなかった。

本研究は、上記を観点として、八代集の表現史と複数の私家集の表現特性とを明らかにすることで、和歌の表現研究を新たな段階に展開した。

研究成果の概要(英文)：This study reached following three results: First, the development of the poem of "Narikeri" in the Hachidaishu was examined from the perspective of rhetoric and the interrelationship between the words and phrases. As a result, it was revealed that "Narikeri" is characterized by a shift from intellectual expression of the Kokin style to the introspective as well as resentful articulation. Secondly, the study of the form of the end of poems issued in the early one hundred waka poems, it was cleared that the poems of Yoshitada, Shitagou, and Egyou are dominated by the usage of sentiments, while the Shigeyuki Hyakushu [one hundred poems] have the least number of sentiments usages. This study shows the public nature of the Shigeyuki Anthology significantly influences the results. Finally, in addition to annotating the Oe Chisato Anthology (poems 1-40), I also clarified the characteristics of vocabulary and syntax, and the relationship between the Kudai poems and the Waka poems.

研究分野：国文学

キーワード：和歌 表現 助詞 助動詞 構文 文章構成

## 1. 研究開始当初の背景

文学研究における古典和歌の表現研究は、昭和40年代から本格的に始まり、大きな成果を挙げた。研究の開始当初は、歌枕・歌ことばに関する辞典が複数刊行されていたことがよく示すように、素材を規定する自立語の表現研究は成熟していた。とすれば、自立語に加えて付属語をも対象とした研究の段階を迎えていたといえよう。

素材が限定される和歌は、よく言われるように「何」を詠むかではなく、「どのように」詠むかが肝要である。国語(日本語)の場合、「何」すなわち事柄(素材)を表すのは自立語であり、「どのように」については、付属語が決定的なはたらきをする。歌枕・歌ことばの豊かなイメージは、付属語の巧みな使い方でも効果的に表現される。だからこそ、歌論で「てにをは」が重視され、和歌が限定された素材を典型的に詠みながらも、秀歌と凡歌との差が生まれるのである。

自立語に加えて付属語を考察することは、一首全体の表現の組み立てを考察することに他ならない。したがって、一文がいかにか組み立てられるかという構文の把握が必要である。また、句切れを有して、一首が複数文から構成される場合は、各文がいかにか一首に統合されるかという文章構成を理解しなくてはならない。これによって、初めて一首の表現が総体として明らかになる。

そこで、本研究は、助詞・助動詞・構文・文章構成から、八代集時代の和歌の表現を考察する。

## 2. 研究の目的

本研究は、助詞・助動詞・構文・文章構成を観点として、以下の点を考察する。第一は、古今歌風から新古今歌風にどのように展開したかという通時的な考察である。第二は、同時代の複数の作者の表現を比較考察することで、それぞれの表現上の個性を明らかにするという共時的な考察である。

## 3. 研究の方法

(1) 八代集において、古今的表現がどのように新古今的表現に展開したか。(通時的研究)

代表的な古今的表現である、助動詞の複合「なりけり」を句末、歌末にもつ歌について、修辞・構文・文章構成から、その変化の推移をたどる。

(2) 古今集との比較において、三代集時代の各歌人の表現に、どのような特徴があるか。(共時的研究)

大江千里集の詳細な註釈作業(通釈・各句すべてを取り上げた語釈・補注・句題と和歌との比較対照)を通して、古今集との比較から、本集の語彙・構文・文章構成の特徴を明らかにする。ただし、註釈においては、和歌の表現史に位置づけるために、比較の対象は古今集に限らず、上代・中古・中世の和歌を調査の対象とする。基本資料として、千里集の本文・歌末語・句切れ・構文などのデータベースを作成する。

初期百首(好忠・順・恵慶・重之)の歌末形式を、古今集と比較して、各百首の表現特性を明らかにする。基礎資料として、各百首の句切れ・文末語・文の種類・構文などのデータベースを作成する。なお、古今集については、「助詞・助動詞・構文・文章構成を観点とした、三代集の表現研究」(研究代表:小池博明、基盤研究C、2012年~2016年、課題番号24520259)で、すでに作成済みのデータに必要な事項を加えた。

## 4. 研究成果

(1) 八代集において、古今的表現がどのように新古今的表現に展開したか。(通時的研究)

「なりけり」歌と修辞

「なりけり」は、理法の発見という驚きを表す。したがって、「なりけり」を句末・歌末に含む歌(「なりけり」歌)は、本来は内面的、述懐的な性格をもつものである。しかし、修辞を通して新しい発見や解釈を表現することを狙いとした古今的表現では、求められたのは理法そのものの発見というよりは、新しい発見や解釈の表現であった。そのため、修辞を伴う「なりけり」歌は、修辞を伴わない「なりけり」歌に優勢だった。それが詞花集では、理法そのものの発見が優勢となり(その対象の多くは仏教的真理である)、「なりけり」歌が本来もつ内面的、述懐的な性格が目立つようになる。その後、三代集回帰への性格をもつ千載集では元に戻るが、新古今集では両者がほぼ同じ割合となること、「……は……なりけり」の構文をとらない詠嘆の用法が増加すること、「……は……なりけり」の構文でも内面的、述懐的傾向が明瞭な用例が見えることなどから、詞花集で見られた特徴は新古今集に継承されたと思える。この変化の根底には、古今的表現を支えた理知的発想そのものの変化があると考えられる。以上は、「修辞から見た『なりけり』歌の変遷 古今集から新古今集まで」(『日本語文化研究』24 2019)で公表した。

複数文構成の「なりけり」歌の接続

八代集における複数文構成の「なりけり」歌の文の接続について、特徴的と見られる現象について、以下を指摘した。

まず、八代集の接続の基調は、順接・逆接・解説という、論理を観点とする類型であった。し

かし、通時的に見れば、詞花集以降に因果関係による論理性の弛緩が見られる。

また、前件が後件の成立に関与する程度が、接続の種類中最も弱い転換接続は、千載集以降にまとまって見られた。一首の構造として見れば、千載集の特徴に、「もみぢ葉のみな紅に散りしければ名のみなりけり白河の関」(千載集 364)のような、題述構文の主題と解説との倒置構造を指摘できる。新古今集では、「なりけり」句が歌末以外にあって、「いとひてもなほいとほしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮れ」(新古今集 1620)のように、主題と解説の関係から外れる。ここに、新古今集の表現に特徴的な、「言語の曖昧な連絡」「構成モルーズ」といわれる、文(句)の独立性が強く、不即不離な関係の一端を見ることができた。ここにもまた、文(句)相互の関係における、論理性の弛緩を指摘できる。これもまた、その萌芽は詞花集に看取された。以上は、「句切れをもつ『なりけり』歌の表現構成 文(句)と文(句)との接続」(中國文化大學國際・外語學院日本語文學系國際學術研討會 2021)で口頭発表し、同論文集に論文が掲載された(査読有)。

「……ものは、……なりけり」「……ものなりけり」の構文

古今の表現を代表する「なりけり」構文のうち、名詞「もの」を含む「……ものは、……なりけり」「……ものなりけり」について八代集を調査した。その結果、「なりけり」構文における「…ものは、……なりけり」の占める割合が、拾遺集でピークに達することがわかった。秋本守英氏によれば、古今集に多い「……名詞は、……名詞なりけり」は個別的体験による個別的表現であり、「……ものは、……なりけり」は、理法を個別的体験に基づいて、発見、解釈する形だという(『なりけり』構文続貂 『ものは』の提示を中心として 『王朝』3 1970)。とすれば、「なりけり」構文の表現に、通時的な展開を認めることができる。また、主題のない「…名詞なりけり」は、新古今集での割合が格段に高い。これは、新古今集に特徴的な体言止めに通じる構文である。以上は、「和歌表現史研究への提案 『なりけり』と修辞の関連を例として」(表現学会全国大会 2019)で口頭発表した(招待有)。

(2)古今集との比較において、三代集時代の各歌人の表現に、どのような特徴があるか。(共時的的研究)

#### 初期百首の表現特性

初期百首について、歌に詠む事柄、すなわち素材を表現主体がどのように捉えて歌を詠もうとしているのか、また、表現主体がどのような態度で聞き手(読み手)に伝達しようとするのかといった観点から、初期百首の表現を検討した。具体的には、素材および聞き手に対する表現主体の態度が、文末、特に和歌では歌末に目立って現れることから、歌末の表現形式(品詞の種類、特に助詞・助動詞の種類、活用形、係り結びの有無など)を調査し、古今集との比較で考察した。その結果、次のことが指摘できた。

第一に、好忠・順・恵慶百首は、感動文(註)が優勢であることから、表現主体の感動を直接的に表現する傾向が強い。その大きな要因に、体言止めの歌が多い沓冠歌 31 首の存在がある。そこで、好忠・順・恵慶百首から沓冠歌を除くと、古今集と同じように判断文(註)が最も多く、それに感動文が続き、要求文(註)が最も少ない。とすれば、古今集の部立にはなく、創作の自由度を狭める沓冠歌を除けば、歌末形式の次元では、この3つの百首歌の素材の捉え方や、聞き手に対する伝達の態度は、古今集の埒内にあると理解される。これを前提として、好忠・順・恵慶百首において、それぞれに個別的な特徴を見ることができる。

第二に、重之百首は、歌末形式の傾向が、好忠・順・恵慶百首と異なる。重之百首では、判断文・要求文・感動文の順に多く、感動文が最少である。感動文が少ないのは、重之百首の成立の場が公的なものであったことが関係する可能性がある。

第三に、初期百首は、表現主体の聞き手への働きかけが弱い。これは、初期百首が成立する場に、贈答歌のような直接問いかける相手がないことが、要因であろう。

(註)判断文・要求文・感動文といった文の種類については、塚原鉄雄・東節夫『よくわかる国文法』(旺文社 1974)などを参照した。判断文とは、話し手の素材に対する判断を表す文。文末形式は、用言やほとんどの助動詞の終止形、係助詞の結びとなる連体形・已然形など。要求文とは、話し手が聞き手に実行や判断を要求する文。文末形式は、疑問の係助詞の結びになる連体形、疑問の終助詞、命令形など。感動文とは、話し手の素材に対する感動や詠嘆によって統一された文。文末形式は、体言、形容詞・形容動詞の語幹、活用語の連体形、詠嘆の終助詞など。以上は、「歌末形式から見た初期百首の表現の特徴 好忠・順・恵慶・重之」(和歌文学会東京1月例会 2021)で口頭発表した。今後、論文化する予定である。

#### 大江千里集の表現特性

1番歌から40番歌までについて、注釈を行った。この注釈は、千里集の和歌が句題を直訳した生硬稚拙なものだとされ、低く評価されてきたことについて見直し、妥当な評価を行うことを目的とする。

その作業を進める中で、それぞれの歌について、語彙的特徴(たとえば、10番歌に「あたたけき」とあるが、この語は和歌にはほとんど用例が見出せないこと)構文的特徴(たとえば、1番歌「やまたかみふりくる霧にむすればやなく鶯の声まれらなる」において、確定条件句にミ語法が含まれる用例が稀少であること)文章構成的特徴(たとえば、「いづこ(く)にか」は、「いづこにか世をばいとむ/心こそにも山にもまどふべらなれ」[古今集 947]のように、通常は初句にあって、「か」の結びが第3、第4句にあるが、3番歌「しづかなるときをたづねていづこにか花のありかをともにたづねん」では、第3句に置いて句切れがないという特徴を指摘しう

ること)について、多くを指摘した。

また、千里集全体の特徴として、「……なりけり」「……ば……けり」という古今的な類型構文が、古今集よりも高い割合であることが指摘できた。この点では、千里集は古今集以上に古今的であるといえる。半沢幹一氏は、新撰万葉集との比較で、千里集の一首の構成の類型性を指摘されたが(「大江千里『句題和歌』における和歌 その評価の見直しのために」、『伝統と変容』ペリかん社 2000) 古今集との比較においても、同様のことが指摘できそうである。以上は、「釈論大江千里集(一)(二)(四)(六)(八)(十)」(『長野工業高等専門学校紀要』51~56、2017~2022。いずれも電子版のみ)、「釈論大江千里集(三)(五)(七)(九)」(『共立女子大学文学部紀要』65~68、2019~2022。査読有)で公表した。

もっとも、千里集には、古今集との相違点もある。たとえば、古今集では、「……は……なりけり」のうち、29例、約8割が、「名詞+は」の形をとる。「連体形+は」は、9例、約2割である。千里集は、前者6例、後者5例でほぼ同数である。この一因に、句題が和歌の素材を制約することがあげられる。以上は、「『千里集』の句題と表現 『質の高い教育』のみならず『文化の多様性』」(中國文化大學國際・外語學院日本語文學系國際學術研討會 2022)で口頭発表し、同論文集に論文が掲載された(査読有)。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 小池博明	4. 巻 -
2. 論文標題 句切れをもつ「なりけり」歌の表現構成 文（句）と文（句）との連接	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2021 年中國文化大學國際・外語學院日本語文學系國際學術研討會 論文集	6. 最初と最後の頁 74 - 84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 半沢幹一・小池博明	4. 巻 68
2. 論文標題 釈論大江千里集（九）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共立女子大学文芸学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小池博明・半沢幹一	4. 巻 55
2. 論文標題 釈論大江千里集（八）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 長野工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小池博明	4. 巻 -
2. 論文標題 『千里集』の句題と表現 「質の高い教育」のもたらす「文化の多様性」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022 年中國文化大學國際・外語學院日本語文學系國際學術研討會 論文集	6. 最初と最後の頁 148 - 155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小池博明・半沢幹一	4. 巻 54
2. 論文標題 積論大江千里集(六)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 長野工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 半沢幹一・小池博明	4. 巻 67
2. 論文標題 積論大江千里集(七)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共立女子大学文芸学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小池博明・半沢幹一	4. 巻 53
2. 論文標題 積論大江千里集(四)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 長野工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 半沢幹一・小池博明	4. 巻 66
2. 論文標題 積論大江千里集(五)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共立女子大学文芸学部紀要	6. 最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小池博明	4. 巻 24
2. 論文標題 修辞から見た「なりけり」歌の変遷 古今集から新古今集まで	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半沢幹一・小池博明	4. 巻 65
2. 論文標題 釈論大江千里集(三)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 共立女子大学文芸学部紀要	6. 最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小池博明・半沢幹一	4. 巻 52
2. 論文標題 釈論大江千里集(二)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 長野工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小池博明・半沢幹一	4. 巻 51
2. 論文標題 釈論大江千里集(一)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 長野工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小池博明・半沢幹一	4. 巻 56
2. 論文標題 釈論大江千里集(十)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 長野工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 1件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 小池博明
2. 発表標題 句切れをもつ「なりけり」歌の表現構成 文(句)と文(句)との接続
3. 学会等名 2021 年中國文化大學國際・外語學院日本語文學系國際學術研討會(國際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小池博明
2. 発表標題 『千里集』の句題と表現 「質の高い教育」のもたらす「文化の多様性」
3. 学会等名 2022 年中國文化大學國際・外語學院日本語文學系國際學術研討會(國際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小池博明
2. 発表標題 歌末形式から見た初期百首の表現の特徴 好忠・順・恵慶・重之
3. 学会等名 和歌文学会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 小池博明
2. 発表標題 ワークショップ 和歌表現分析の新展開 和歌表現史研究への提案 「なりけり」と修辞の関連を例として
3. 学会等名 表現学会(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	神尾 暢子 (Kamio Nobuko)		
研究協力者	五月女 肇志 (Sotome Tadashi)		
研究協力者	西 一夫 (Nishi Kazuo)		
研究協力者	西山 秀人 (Nishiyama Hidehito)		
研究協力者	山田 昌裕 (Yamada Masahiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------